

## 動員記 —ある女学生の記せる—

すぎやま あきえ 著  
あかぎ ただし 編集・解説

三月二日 日曜日 晴

五時半ごろ起床する。早く用意して六時半ごろ家を出る。今日から、考査入学試験が始まると思ふと、少しも落ち着かない。汽車はたうたう津山駅についてしまった。

各学校への受験者は汽車にいつぱいであった。技芸学校現 作陽高校へ来てみるといつぱいの人であった。みんな胸をおどらせながら、楽しさうに語っていた。久しくして講堂に入る。私はC列の前から十二番目であった。

つぎつぎに番が来て呼び出される。私より三番の人まで午前中に済んだ。後へかえって弁当をいただいて、少ししているまに始まる。わからない所があった。少し遅くなって、三時五十分高野着の汽車で帰る。

：今日の口答(頭う)試問の問題

◎貴女の姓名を言つてごらんさい。

◎どうしてこの学校を志願しましたか。

◎私達がこうして毎日毎日勉強に励むのは、どうしてですか。

◎どんな人がよい日本人といへるのですか。

◎貴女の学校には火が出ましたか。どうしてですか。

◎では炭は何時よりも生産して居ないのでですか。

◎このごろ切符制になりましたが、どうしてですか。

◎切符制になったもので、どんなものがありますか。

◎掃除をするときの注意をのべなさい。大勢で掃除をする時の注意について。

◎昔から今までで忠君愛国の行をした人の名前を三・四人言つてごらんさい。

◎四月の一番初めに国旗を建てる日がありませんか。何といふ日ですか。

◎あなたの家では玄米食はよろしいのでせう。どんな効果がありますか。

◎このころは、防空訓練が行はれ、家でも用意がしてあります。去年の夏は大阪では大変蚊が多かったといつて居ました。どうしてで

せう。

◎二円の下駄に三割の税がつかしました。この下駄はお金をいくら出したらよろしいでせう。

三月三二日 水曜日 雨

今日は元家本家の恭助兄さん著者のふた従兄半にあたる人が出征した。合憤(ママ)朝からの雨で、兄さんが出発するころは本降りとなったが、見送人はいつとも多い位で盛んな歓送であった。送つて帰つて見たら、丸山の叔父さんから手紙が来て居た。午後二時五分の汽車で津山へ、叔父さんの注文の品を買いに行つた。えのぐや毎日年鑑や文鎮はなかつた。久保や照文堂、弘文堂津山市内の書店兼文具店にもなかつた。六時前に高野着の汽車で帰つた。一日中雨降り、びしょ(びしょ濡れ)になつて帰つた。

六月三日 火曜日 曇後雨

今朝は、夕べ(昨夜)の映画がたたつて大へんねむかつた。

毎日この室(工場の宿舍の室)に来てから、心から楽しい事がない。作業筆者は郡是製糸・津山工場に学徒動員され、飛行機の部品製造に従事していたは遅れているし、室はいん気なし、この人たちと三年間生活すると思ふとうんざりしてしまふ。

朝のお汁は、わかめ、大根、あげ、であった。

皆三杯すった吸ったので自分も！。

授業になってほんとうにねむくってたまらなかつた。川北先生の時々物々、皆修行のお話。私達はほんとうにこの生活をしなくては。お昼は大根菜、えんどうのおかず。

午後作業。大へん暑いと思つて居たら夕立になつてきた。家では、刈った麦をぬらすまいとして、小さい妹まで一心に麦入れ(ママ)をしていてであらうと思ふと、少しでも早くとんで帰つて手伝いたい気持ちでいっぱいであつた。ピカッと光つては雷鳴がとどろき渡り、そのために家の者はどうしているであらうか、又、家に雷は落ちはしなかつたか等思つていと、何もする気がしなくなつて気持ちが落ちつかずにこまつた。あるひは終事(シマイ)ゴト夕食の後片付けや明朝の食事の準備等が終わらずに、お母ちゃんが濡れながら終事をして居るのではなからうかしら、少しでも早く家に帰りたくつて帰りたくつて泣きたい気持ちになつた。

夕食は、まずに大根おろし、私達が寮に帰る途中が傘なしでは通れない。小田孝子さんに入れてもらう。入浴は八時ごろであつた。入浴に行く前に△△さんがXXさん、○○さんと論争して居られた。どうしてこんなにかしら。

入浴後妹の便りをいただく。嬉しくつて嬉しくつてすぐ封を切つた。私の塗つた塗り絵が入つて居た。室の人、皆に見せてあげた。二度目に出した便りも、もうついで居る事であらう。

便りが待ちどうしい。

#### 六月一四日 水曜日 曇後雨

今朝はどうふのおしる。七時半に工場に入る。五分程おくれた。九時まで実習をして、九時以後式場の準備をした。その前、実習の時、△△さんの自我(エゴ)をお友達と悪口を言い合つた。自分ばかり道具を持つて、少しも人に貸さないばかりか、人の物まで取つて使つて、ほんとうに気が悪くて困つた。

式(入所式?)は大へん厳粛であつた。私は永いこと、姿勢をくづさずに居るのが大へん苦しかつた。いろいろ私達をほめて下さつたが、私達はますますきん張しなくなつてはならない。式後、昼食は昆布、たけのこ、ふきなどのませ飯。食後一時半ごろまでお友達と休みながら騒いだ。

一時半より二時半まで川北先生の修身。二時半より座談会、コの字型になつて大勢の先生方と共に向きあふと、急にかなしくなつて泣けて泣けて仕方がなかつた。

校長先生のお話しによれば、倉敷の人達倉敷の工場に動員された人達に比べて私達は大へんよい待遇をうけている事を聞かされて、私達はほんとうに有難いと思つた。それなのにいろんな不平を言つていた事は大へん恥ずかしい事であつた。

私達の為にお菓子をいただいて(あるいは、

食料事情が悪い中でも動員の初期には、菓子の特別配給でもあつたのかも知れない)久し振りに戴き、家の弟妹に送つてやらうと思つたが(著者は一男四女の長女、一男は第五子)なかなか困難な事である。

夕食、しろササゲ、のりのつくだに。入浴をはやくすませて、後、校長先生の修身(の授業)に向かう前にペンを走らす。

昨日からまだ今日もかかつて手紙が書けない。はやくかへつたらかかうと思つてペンを置く。

#### 六月一五日 木曜日 晴

今朝はおぼろ昆布にわかめのお汁。

七時半より実習工場で作業。津山高女(津山高女等女学校)、津山商(津山商業学校)が十時入所して入所式があつたので、永い間、午前中は休けいした。お昼は、いわしに大根菜のおかず。

一時ごろ、津山高女、商業(商業学校)の先生に、基本訓練(きほん)を見て戴いた。私の前であつた(先生が著者のすぐ前で見えていたのだろうか)ので、ほんとうにひやひやした。唯一心に(基本訓練を)した。

後、式後に第三教室に入つて現場に行くについで、隊の編成、注意等を聞き、現場に入つて晩まで見学した。晩はキャベツのおかず。夜、警戒警報があつたので、モンペをはいて床に入つた。

六月一六日 金曜日 晴

朝、わかめのおしる。七時二十五分までに新食堂にいつて朝礼をした。新食堂を出て現場に入り作業をする。いろんな作業をして居ると、お母ちゃんの事を思い出してかなしくなつて来る。

お父さん、お母ちゃん、妹、祖父母が赤くうれたクイビ（グミ？）やユスラを仕事の間にとつて喰べている姿を思い出して悲しくなつて来る。いろんな事が次ぎ次ぎと思い出されて来て、ただ家に帰りたいばかり…。

お昼、大根、わかめ。午後二時より作業、その間外に出て日光に思ふ存分当たつた。

午後五時まで作業して晩、だんごの入つたおしる、干しバナナを四つずつ戴く。

今日も警戒警報のため、モンペをはいて床につく。

六月一七日 土曜日 曇

朝、わかめ、玉ねぎの醤油じる。麦飯。起床四時半ごろ、警戒警報のため六時半より作業。作業場に入って作業。いやでいやで、家の事、お父さん、お母ちゃん、幸ちゃん幸子Ⅱ一番上の妹、穰ちゃん（弟）等家の者が皆にぎやかに食事をして居る姿を思ふと、淋しくつて淋しくつて、何もする気がしなくなつて、悲しくつて悲しくつてたまらなかつた。

午前中の時間が永くつて、十一時食事までの

時間（？）が大へん永くつて、人の時計ばかり見ていた（当時の女学生のほとんどは、時計など持っていない）なかつた、と思われる。

わたしたちの一日に置いて、食事、眠る事より外に、私は楽しみがない様な気になつてしまつた。

昼食、キャベツ、生のイカナゴの酢のもの、大豆飯。十一時四十分より作業、四十分の（休憩）の間にかわら運び。

又これから五時間働くかと思ふと、泣けて泣けて、戦争の事も何も思へなくて、もう家の事が思へて、もう家に帰りたくつて、家でお萩、円多餅（牡丹餅の書き間違いか？）が喰いたくつてかなわない。

仕事をして居ていろいろ家の事を思つて居ると、今戴いている干しバナナ・ポーロを家に送つてやりたいと思ひ思ひ、今日まで来てしまつた。

今日は小包紙を買ひに行かうと思つて居た。

四時に作業を終わつて、第三教室で座談会があつた。先生は前に委員になつた人達ばかりにあてられる。そんな人にかぎつて答えはぐずぐずしてほんとうに見つともない。

後、食事に行く。昆布、大豆の煮干、麦飯。入浴を早く済ませて、村尾先生と大勢買物に行つた。河原商店に行く。

草履が買へなかつた。小包紙も買へなかつた。それよりも、先生が、手紙を勝手に出してはい

けない、出した人はちゃんと門番にたのんであるから、わかつて居ますからといわれて、良心がとがめてならなかつた。はやく床につく。

六月一八日 日曜日 晴

朝食、麦飯、昆布、キャベツ、玉ねぎの醤油汁。

六時半より作業。朝が来ると、又今日一日働かねばならない、と思へばうんざりしてしまふ。時間つぶしの様な仕事（？）をした。

お昼の合図を聞いて飛び上がる思ひであつた。お昼は、大豆飯、大根、菜、豆腐のおかず。

かわらを運んで午後の作業にかかる。又今日も午後作業かと思ふと…。

十分間の作業が終わつてから少し仕事（？）がひまであつたので話をして居たら、区長さんに注意を受けた。

※※さんと二人、時計ばかり眺めて、時間のたつ事ばかり思ひ…五時終。

晩食、キンカイモ（じゃがいも）、玉ねぎのおかず（おかず）、大豆飯。いろんな野菜類が食卓に乗るたびに、お父さんが丹精こめて作られた野菜を妹達といっしょに採つた事がいろいろ思われて、又、家恋しさのため、食事をしながら目頭が熱くなるのを禁じ得なかつた。

五時過、食事、入浴を済まして寮にかえりながら、西の空に傾いた陽を浴びて一心に農事を

して居られる姿が思われて、妹達は炊事をして  
いるであらう、又、風呂の用意に多忙な毎日を送  
つて居るであらう、でも毎日毎日お母ちゃん  
の膝元で生活できて、ほんとうに楽しく生活し  
て居るのに比して、私は毎日毎日、自分の満足  
する生活を寮に入つてした日がない。

毎日毎日味気ない生活、作業をしていても、  
家の事、お母ちゃん、妹、弟、お父さん、お祖  
父母さんの事が次々と思へて、作業に力を入れ  
た事がない。八時ごろでも永い日は薄暗くても、  
まだ一心に仕事をしているんであらうか。手伝  
いをしてあげたい。

毎日おなじことを想ひながら、床につく。夜  
中目がさめると、幸ちゃんと並んで家の中に寝  
ているように思えて、うそとわかつて淋しい想  
いにうたれる。ああ、今日も又暮れて行く。

### 六月十九日 晴

五時半起床、室の掃除当番であつたため、永  
幡さん、谷さんと三人でする。

朝食、チシヤ、玉ねぎの醤油汁、麦飯。七時  
半より作業。今日の午前中はやや仕事に精が出  
た。

昼食、大豆飯、大根、大根菜、丸干いわし。  
かわら運びをする。十二時二十分より作業。午  
後から大へん体がだるくつて十分間の休憩を待  
つばかりした。外に出て日光浴をする。又五時  
まで作業、と想ふとすぐ、家のことを思ひ出す。

今日は(家では)仕事はどんな事をして居るので  
あらうか。

終わりになつて、真木さんといっしょにして  
いた女工さんが面白い事を言つたので、疲れが  
薄らいだ。二十一日に学校へ帰るのに手紙を出  
して居たので、誰が来てくれるであらうか、と  
そんな事をいろいろ考えて見る。それがただ楽  
しみである(何日かおきに、動員先から在籍す  
る学校に、短期間『たとえば、一日だけとい  
ふに』復帰し、家族の誰かが面会に来ること  
になつていて、生徒達はその日を指折り数えて  
待ち侘びたらしい)。

五時作業終。晩食、大豆飯、きゅうりの酢の  
物。今日は女工の人の残業がある為、入浴が八  
時からであるため、配給に戴いた六銭の氷砂糖  
を少しなめる。

皆外出して、二・三人と室でこれ(この日記  
を書く。又今日も一日暮れてしまった。お父さ  
ん、お母さんほんとうに御恩がよくわかりまし  
た。こんど帰つたら、どんな事でもしよう。又、  
言いつけは絶対にきくことにしよう。

一日の仕事を終えて、家内の者が楽しく食事  
をしている様か思われて、ほんとうに悲しくな  
つて来る。家のはもう、なすび(ナス)がなつて  
居る事であらう。夕日が真赤になつて西の山に  
はいりかけて居る。お母ちゃんもきつと太陽を  
見つめて居られるであらう。

二十一日をたのしみ(に待ながら)、でも、家

に帰れないのが悲しい。一度でもよいから皆と  
一緒に眠りたい。

七月の帰宅未だる日を楽しみにして日日を送  
らう。

### 六月二十日 火曜日 晴後小雨

五時半起床。朝食前あき地で体操をした。大  
根、ネギ、豆腐の味噌しる、麦飯。

作業、午前中いやいやながら作業をする。

十一時前注射(チブスリチフスの予防注射)を  
する。後気分が悪くなつて、大町先生に連れら  
れて寮に帰る。少し休んで昼食。キャベツの煮  
物。寮に帰り甲元さんと二人で少し休む。一時  
ごろ作業場に行く。体が大へんえらくつて仕事  
が出来ない。なまけなまけする。

十分間の休憩の時に外に出て伏す。こんな時  
やたらに家の事が思われて来る。五時までの時  
間の永かつたこと。

いつも食事一時間前にはお腹がグウグウとい  
つ。家ではこんな事は少しもなかつたのに……。  
晩食、キンカイモ、玉ねぎ、丸干いわし。食後、  
入浴は注射のためによして、友三人と室に残る。  
他の人は天勝一座の慰安会を見に行く。光井菊  
ちゃん(筆者の生家の近所に住む友人)よりハ  
ガキを戴く。又家の事が思われて泣けて泣けて  
仕方がない。明日はどうか病気がよくなりませ  
う様に、そして家の者誰か来て呉れるか、少しで  
も帰宅の時間が戴けます様に念じながらペンを

置く。

お母ちゃん、お父さん、おじいさん、おばあちゃん、幸ちゃん、ともちゃん(二番目の妹)、智代ちゃん(三番目の妹)、穰ちゃん(この八人が著者の家族)皆元気で。私が二十一日に帰れたら、皆、家に居って呉れるように。昭江の淋しい願が聞こえたかしら…。

六月二一日 水曜日 (この後、気象・曜日の記述がない日が多い)

待ちに待った今朝。よろこび勇んで学校に向かふ。十一時の汽車で帰れるつもりで勉強の事も何も考えず、ただ家の事ばかり考えていた(この日、授業終了後、一時帰宅の許可が出ていた、ということらしい)。

二校時が終わったころ、幸子(前出・幸ちゃん)が来てくれた。校門の処を出ると、泣けて泣けて仕方がなかった。幸子が笑ふとかなんとか、そんな事は少しも考えずただ涙がほおをつたふばかり。後二時間(の授業を)して居たら(受けていたら)十一時(の汽車)では、どうしても帰れない。ぬけて帰ってやらうかと考えたりする。西洋史の時間は幸子を見たり(一窓ガラス越しに妹の姿が見え隠れしていたのかも)しれない。帰る汽車の時間を計算して、唯夢中になる。そして三校時が終わって泣く泣く幸子を帰らし、自分も、と、必ず帰ることを約束する。帰れないとは思いつながら、修身の時間に、十一

時(の汽車)で帰れる事を願ふ。が、はかない願いのみ。十二時は過ぎてしまふ。すぐ帰ろうとして、又、西本先生が新聞を持って来られる…。大本営発表の記事でも聞かされたのだろうか?。後、島田先生が汽車賃を下さる。九円八十六銭也。

先生は、三時半集合(寮に集合するのか、それとも、もう一度学校に集まれというのか、どちらとも原文からは分からないが、「帰宅許可」とはいいながら、時間制限が厳しかったことがうかがわれる)であるから(動員される前汽車通だった人は帰られない、との事。でも、約束をしていたのに、家の者は待つて居るであらうと、思ふと決心してぬけて、自動車乗場(バス停なのか、バスセンターなのか?)へ行く。

林野(ハヤシ)行はなくなっていた発車した後、だった。泣く泣く家へ歩いて帰る(とはいっても、学校から著者の実家まではおよそ八キロメートルくらいはある)。荷物(いったい何が入っていたのか?)を二つ持ち、汗をふきふき、一心に、半ば走る様に歩く。少しでも早く歩けば、それだけ家に居る時間が永くなると思ふと、一心に歩く。下押人：シモオシイレ(家まであと二キロメートル前後?)の辺では足が痛くつて、もうへとへとになる。巴、智代子に合うと泣けさうになったので、荷物を持たせて走って家に帰る。胡瓜が大きくなっていた。お父さんが裏の方で仕事をして居たのに泣け

そうになったので、物も言わずに家に入る。幸子が火を炊きかけていた。

すぐに食事。のり巻、卵焼、胡瓜の酢の物、たけのこ、魚、馬鈴しょのもの。喰べようと思つてもなかなか喰べられない。すぐ満腹になる。次第に時間が迫つて来る。母は、遅れない様に早めに駅に行く様に言うけれど、少しでも(長く)家に居りたい。

オイリ、水餅(カキ餅)、等。又スルメをもらつて行く。高野駅まで送つてもらふ。幸子、ともえ、ちよこ、穰ちゃん。汽車が来ていざ動き出すとなると、穰一が泣いて泣いて、私まで涙がほおをつたつて見えなくなつてきた。イナリの田でおばあさんが畦豆を植えていた。おばあさんだけあわなかつたので、なんだか心残りであつた。

郡是に出動してから初めのうちは、めずらしいのと友達が大勢であるのとで、さう悲しいとも思わなかつたが、日がたつにつれて家に帰りたくつて帰りたくつて、思ひ出すとたまらなくなつて未る。

学校もやめ、又、勉強も何もいらぬ。家に帰つてから、今までいるいと御苦労をかけた御恩返しに、お父さん、お母さん、又妹達の事一切を心からしてやりたいと思ふと、矢もたてもたまらなくなつて来る。これから後幾月かお母さんの許で暮らすこともできないと思ふと泣けて泣けてたまらぬ。

でも七月五日の公休日を楽しみに…。

六月二五日 日曜日

〔六月二日から三日間、日記が書かれていない。その理由を著者に聞いてみたが、思い出せないとのことだった。なお、この日記述されていることは全く理解できない。著者自身も「どうしてこんな日記を書いたんだろう」と、やや困惑気味だった〕

七時ごろ学校を出て高技(現 作陽高校)に帰り西洋史、国語、理科、公民、家事、珠算。六時ごろ学校へ帰る。

六月二六日 月曜日

〔気象の記述がない。また、この日から「三時五十分起床」という記述が続く。いくら日の出が早い季節とはいえ、信じられない起床時刻である。著者に事情を聞けなかったのが残念〕

朝三時五十分起床。朝食、キャベツの味噌しる。五時より作業。午前中三組ずつ、六組摺合せる。午後又、三組ずつ摺合せる。計十二組。午後一心にする。昼食、大豆飯、豆腐のヤッコ。

二時半以後食事まで日記を書いたり洋裁。幸子より便りがとどく。淳一「この人が誰なのかは不明。あるいは、中原淳一画伯のことかもしれない」の画があった。晩食、きゅうりの酢もみ。ぎ綿(ママ) どんなんものか不明、石けん、シャンプーを配給してもらう。計四十四銭。

六月二七日 火曜日 (この日も気象状況は記されていない)

三時五十分起床。朝食、オボロコブ、玉ねぎの味噌しる、こうりやんの混合飯。午前中いやながら作業をする。

昼食、ジャガイモ、玉ねぎ、牛肉(動員されて初めて肉が寮の食卓に上った?)の甘煮、こうりやん飯。二時半まで作業。摺合わせを計十一した。

洋裁をする。五時二十分晩食、ジャガイモの昼の残りを煮た甘煮。入浴をすませて、お友達といっしょに帰れる

日をたのしみに日を送る。明日は電休日なので休業。初めての休みなので楽しくってたまらない。パンの配給を戴く。大へん大きいので嬉しかったが、喰べて見てうんざりした。ほんとうにおいしくもない。みな、いらぬいらぬといひながら喰べて行く。

六月二八日 水曜日

朝から自由なので洋裁をする。午後外出して高野神社(現 津山市二宮)の近くの店で下駄を買ふ。大へん高くってどうしようかと迷ったが、お母さんとお父さん妹の土産にとだれもかれも買われたので、お母さんの下駄がよくちびて、私達がいっしょはいて、ちびかせてしまうので買ふ。四円八十銭なり。後洗髪、洗濯をする。

六月二九日 木曜日

朝三時五十分起床。わかめ、玉ねぎ、あげの味噌しる、こうりやん飯。作業、いやいやながら、する。昼食一時間前位になると、お腹がすいてぐうぐういつて来る。家ではこんな事は一度もなかったのに。(同じ主旨のことが、六月二十日にも書いてある)大きなおわんに、おかつ「おかず」のこと?でも何でも二回もおかわりをしていたのに。家の者がにぎやかに食事をしている様か思ひ出されて、悲しくなってくる。昼食、大根おろし、のりのつくだに。智代子のワンピースを縫ひ上げる。

夕食、胡瓜の酢もみ。夜八時寝につく。

六月三〇日 金曜日 曇

三時五十分起床。朝食、大根のせん切、そうめん、揚(アゲ)の醤油じる。四杯吸ふ(飲む)。こうりやん飯。

今日も又、家に帰れる日を楽しみにしながら、たいぎたいぎ仕事をすする。

昼食、こうりやん飯、昆布、南京(南瓜)。南京は今年初めてで、大へんおいしかった。二時までの時間が永くって時計ばかり見て居た。

晩食、じゃがいも、大根、豆腐の煮物。作業後は三日(七月三日)、作業をしてから(家に帰って、五日の晩工場に帰る事になった。二日に帰れる)

事に、と楽しみにして居たが、帰れるだけでもうれしくつてうれしくつてたまらない。

六月五日に入所して、とうとう永い永い六月は過ぎてしまった。十四日まで基本訓練をして、十五日より現場へ入って、今日までこの二十五日間、毎日毎日淋しい日を送った。一日として満足に暮らした日はない。家へ帰りたい。お母ちゃんの膝元で暮らしたい。

### 七月一日 土曜日 曇

三時五十分起床。朝食、かぼちゃ、わかめの味噌しる。三杯吸う。今日はたいぎたいぎながら作業を一心にする。

昼食、きょうりの酢の物。昼食がすむと、もう一日が終わった様な気がして嬉しい。夕食前、三日の作業後(から)五日の五時まで帰宅が許された。ほんとうに嬉しくつて、でも、(帰宅)できる(日)が少ないのはうんざりする。

おやつも持って来られないし、又胃腸が悪くなつて(工場)に帰つて(来たら)先の(次の)帰宅は許さない、といわれる。でも、前(六月二十一日のこと)に二時間帰つたときの事を思へば、嬉しくつてたまらない。五日といつて居たから、家の者は知らないであらう。

急に帰つて皆を驚かしてやらう。又、四時の汽車に幸子が乗り合わせているやらわからない。穠ちゃんにおみやげを買つて帰つてやらう。いろいろと考えて居ると嬉しくつて嬉しくつてた

まらない。休みがすんで工場へくる日はどんなに悲しいであらう、等考えて見て、又悲しくなつてくる。

### 七月二日 大雨

学校へ授業に行く。横野お姉さん(筆者との関係は不明)の傘をかりる。

### 七月三日

三時、作業終了後帰宅す。院庄駅より、三時四十八分発の姫新線で帰る。

津山駅で幸子(当時、県立津山高等女学校在籍)に合ひ、トランクを持たせて乗る(津山駅で因美線の汽車に乗り換えて帰つたのであらう)。

### 七月六日

今日から又、同じ仕事を毎日毎日しなければならぬ。後(幾)日先で家に帰れるやら、それを思ふと悲しくつて悲しくつてたまらない。

途中病気で室に帰り(筆者は)元来、頑健ではなかつた。作業中に気分がわるくなる等、何かのアクシデントがあつたらしい。一日休む。昼食は喰べなかつた。お腹がすいて困つた。晩、キウリ、ニンジン。

### 七月七日

朝、とうふ、あげ、菜の味噌しる、三杯。昼、じゃがいも、キャベツの煮物。

晩、大根、トウフの煮物。

### 七月八日

朝、こうりゃん飯、のりのつくだに、たくあん、きょうり、のりのつくだに、たくあん、こうりゃん飯。

朝、高野神社へ参拜。大詔奉戴日(戦争を知らない世代には理解できない日かもしれない)で、大詔奉戴式。

作業を一心にしたが、杵が来ないので、二人で十組した。明日曜、学校へ帰れないのでどうしようかといろいろ考えたが、光井守さん(家の近所の人。筆者が動員された会社に勤務していた)に手紙をことづけることにした。門番の人に聞いて木型の木工と聞いて行つた。手紙をことづけて、いろいろ心配していたのに、これで安心した。

夕食、いわし二匹、たけのこの煮物、こうりゃん飯。八時より消燈。

赤松さんが病院へはれものをみてもらひに行くとつて居られたので、私も行かうか、と言つていたら、床についてから村尾先生がわざわざいってくださった。

(この日の記録には、意味不明のことがある。「杵」・「木型の木工」・「聞いて行つた」・「村尾先生がいつて下さつた」とあるが、いったい何を「イッテ」下さつたのか?)

七月九日 晴 夕方夕立

朝お腹を通す(下痢?)。朝食、キヤベツの味噌する、こうりゃん飯。朝礼後お腹が痛くてお便所へ行った。

昼食、たけのこ、ふき、人参、昆布、フロアのまぜ飯。

二時半まで一心にした。計十五組した。作業中村尾先生が病院へ聞かれて、腎臓、ろく膜の疑いがあるからといって、後から後悔した(村尾先生が心配してくれたのに適当にあしらってしまったようで、悪かった、という意味か?)。三時ごろより、私達はもつとしっかりしてお国のためにといふ事を考えてすべての事を行わねばならない、そして学校の名誉をはずかしめない様に、といふことについてお話しを聞く。

後珠算。

夕食、ジャガイモ、豆腐の煮物。

嬉しくつてたまらない。十九日、二十日ごろに家にかへれるかもしれないといわれた。

七月一〇日 月曜日 曇後雨

三時五十分起床。朝食、こうりゃん飯、豆腐、大根、なすのおしる。今日はゆうべ蚊が出て安眠出来なかったので、頭がいたくつてこまった。

昼食、キウリ、たくあん、こうりゃん飯。午前中に村尾先生、中村先生と三人で体温をはかりに行く。三十六・六度。午後作業が終わって

から二十分程度、大町先生と男子寮へ行って診察して戴く。心配していたが疲労だと言われた。うれしくつて嬉しくつてたまらなかった。

夕食、ジャガイモ、フロアの煮物。人浴後日記を書いたり、洋裁のしさし(やりかけのままのもの)をする。

七月一二日

朝食、昼食、まぜ御飯。

作業後洗髪をして昼寝をしていたら、水島さん(同じ工場の人か?)が、面会といつて来て下さった。胸をおどらして面会室に行つて見ると、お父さんが来てくれて居た。泣きさうになるのがまんして、どういってよいのかわからない。トマト、服地を持って来て下さつて居た。

お昼ごろに来て都合が悪かったので又、二度目だとのこと。赤松さん(同じ工場に動員された女学生で、筆者とはとても仲がよかった人)を呼んで来て(トマトを私は三つ、赤松さんは二つ喰べた。食事の事などいろいろと話す。それにつけて?)ニューギニアより帰った勇士(誰のことか不明)のお話しをして下さった。そしていろいろと家の様子。上ノ町の史郎さん(津山市上之町に住む従兄も水島倉敷市に行っているのだとのこと。私達ばかりではないのだ。

いろいろと話をしたが、なんだか思っていることが言へない。夕食前まで話したが時間(面会時間の締切)がすぐ来た様に思った。

門の処まで二人で送って出ていたら大町先生に会った。服地にトマトを包んでいたのを見られたが、どうも言われなかった。

赤松さんと二人で、遅れて食堂で戴く。夕食、キウリの酢物。お父さんが門を出られるのについて帰りたくつて泣けさうになった。何も言えなくなつて、お母ちゃんによういっておいてよろしく言つて下さい」といっただけ。

その夜は、幸子が水島工場に行くかもしれない、といふことも聞いて、いろいろと考えていると、父母に済まない。家は忙しい(筆者の家は、津山市近郊の当時としては大規模な農家だった)のに、手伝いも出来ず、私は体が弱くつて心配ばかりかけているし、又幸子も行つたらほんとうに父母はえらくなる(仕事が多くなつてたいへんだの意)。又、いろいろの用意(妹の動員の準備のことか?)等のことを考えていると泣けさうになって来る。なかなかねむれなかつた(この最後の行は、後日書き加えられたものとも考えられるが、古い日記帳の筆跡からは判断できなかった)。

七月一三日

朝、トウフ、ワカメ、アゲの味噌汁。

朝食、バレイシヨ、フロア。

今日は、作業申お父さんの事、お母ちゃんのこと、又幸子の事等考えていると、何回か擦りすぎた事も度々ある(「擦りすぎ」は不明である

が、何か失敗：工場でよく言われる「オシヤカを出す」というようなことかもしれない。

九月から(妹の動員が)であると、ひとえの寝まき、あわせ、又羽織等、又日用品等の用意、モンペ等の事を思っていると、いろいろお母ちゃんがあ心配されるんであらうと思ふと、すまないやうで、泣けさうになって来る。

夕食、ナス、ジャガイモの煮物。家ではナス漬けや、又ナスの油いり(油いため)等を喰べているであらう。

ナスがたった二切、またジャガイモも小さいのが二切、うんざりしちやふ。夕方、赤松さん、田辺さんと三人でうらへ出て歌をうたったりお話しをしたりした。

室におるのがいやでたまらない。

### 七月一四日 晴

朝食・ナス(なす)が(お椀)一杯のおしるの中に一切位の醤油汁。三杯(飲んだ、という意味か?)。

今日も又、作業をするのがいやでいやでたまらないが、又、家の事、幸子が水島へ行くとしたら、その用意等いろいろと考へながら作業する時が一番楽しい(このくだりは、筆者もかなり混乱していたのかも知れない)。

昼食〇〇さんが私の前にあった多い御飯(御飯をたくさん盛ってある食器を早くとり、又おかずも多いのを取ったのには腹が立った。じゃ

がいも、豆腐、煮干し(この「煮干し」も内容が不明)。今日はやや(食事の量が多かった。おかず、いつもこれくらいあるとよいと思つた。

三時ごろ、赤松さんと二人で植木の処へいってトマトを喰べた。悪いとは思ひながらよいきみだ。一時間程珠算をする。

夕食。(なぜかこの日だけ、食事の内容が書かれていない)

### 七月一五日

朝、三時五十分起床。

午前中、でも、一心に作業する。

昼食、ジャガイモの煮物。二時半の作業後(作業終了後の意味か?)身体検査があるとの事。もし体が悪かつたら、と心配で心配でたまらなかつた。

第三教室で行つた。身長一五四・四cm、座高八四・三cm、胸囲七三・五cm、胞廻(これは?)・二〇cm、体重三六・八kg。

又、男子寮で内臓の検査をした。せき、又、反応について、よし、と言われたので病気ではないのかと心配でたまらなかつた(この文章の意味は分からない)。

夕食、きうりの酢の物。

今日石けんをなくした。夜、心配でなかなか寝れなかつた(寝付かれないまま起き上がって記したものでしょうか?)。すまなくつてお母ちゃんによう言わない(石けんがなくなつたとは言

えないの意。物資が不足し、たった一個の石鹼ですら貴重なものだった状態がうかがわれる)。

### 七月一六日 日曜日 晴

五時半起床。

朝、のり、たくあん、うめのおかず。

おべん当は米飯で、たくあん、うめ干。

七時ごろ学校へ向かふ。少しやすんで、家事、修(修身?)、国語、修、習(習字?)、音(音楽?)。

二時間して門の処まで行って見たが、幸子がまだなので手紙がとどかなかつたのかと思つていたら、四校時が始まる前に門の西へ来て居てくれた。うれしくつてうれしくつて四校時をまたせるのがくるしかつた。修身がながびいて、いらいらしてこまつた。

すぐおべん当を持って河原に出る。私のべん当を妹にやつて、のり巻むすびを二つと大きなトマトを二つ喰べた。久しぶりに腹いっぱいになった。五校時目も授業をせずに(受けずに)外で話した。

妹は又、単腹(マゴ)を買つたのださうだ。お母ちゃんのもの。河原で、着物をお父さんが買われたとか、少し心配になつて来たが、でも妹の話聞いて安心(河原で妹から、家での出来事や様子をあれこれ聞かされた、ということらしいが、意味不明な記述である)。

家で妹はいろいろ用事をして忙しいとの事、

すまないと思った。

妹が帰る時に何もいへなくなつて、ついて帰りにたくつて帰りにたくつて泣けさうになった。私はほんとうに幸福だと思ふ。度々面会に未で戴いて。ありがたい。

四時ごろ学校を出て、五時前工場に帰る。夕食、ジャガイモ、ナスビの煮物。今日は御飯が多かつた。又あすから作業、いやになつてしまふ。

橋本さんが、後二百五十八日で卒業といわれた「橋本さんは上級生だったのかもしれない。あるいは繰上げ卒業のことか？」。

### 七月一七日

朝食、豆腐、ナスビのお汁。三杯吸ふ。

今日からバイス台の配置が違つていた。

昼食、麦とジャガイモの御飯と、ジャガイモの煮干の煮物(ママ)。

今日は午後二時が速く来た様に思へた。作業後、光井の守さん(前出方)へ行つて見たが、小包は来ていなかった。

今日から島田先生が来て下さつた。

洗濯をする。少し昼寝をした。入浴後河原に出るのださうだ。私はこんなになん気になっているが、家ではもう昼休をすませて出かけているであらう。

すまないと思ひながら、体の事が心配で心配でたまらない。これからは心を引きしめて、お

母ちゃんのいわれた事をよく心にきめて日を暮らさう。

中江恒ちゃん等は帰れて、ほんとうにうらやましくつてたまらない。今年は一際の実生活(ママ)は行へれない。かなしくつてたまらない。夕食、キウリの酢の物。昨日より御飯がやや多くなつた。

### 七月一八日 火晴

朝食、ナスビ、ソウメン、ワカメのお汁。四杯吸ふ。麦飯。

作業、やや本気でした。昼食、南京、御飯は麦飯であつた。おかずは二切程でどろどろしていた。御飯も一番少ないので、ほんとうに腹が立つた「量が一番少ないのが著者に渡つた、ということらしい」。

午後より電気がこなかつたので、製型(?)の手伝をした。作業終了後、木型の木工の所の光井守さん所へとりに行つた。服三枚、黒大豆の砂糖のまぶしたのが入れてあつた「近所から通勤する光井守さんが、家からの差し入れ品を持つてきてくれたので、受取りに行つたということだろうか」。

皆十二人に分けてあげたら、一握であつた。西本先生が来ておられたので作業後、西本先生のお話を聞く。

三年以上六年生までの児童の疎開を聞いて私は、お母ちゃんの事を思つたり家へ帰りがつ

たりしたのがはずかしくなつてきた。

今は、国家全員がどんな苦勞をしても戦に勝たなければならぬ。体の続くかぎり働かふ。後、島田先生の珠算。前よりは少し出来る様になつたので嬉しくつてたまらない。

夕食、麦・ジャガイモの御飯。ジャガイモ、たけのこ、フロアの煮物。北さんが呼ぶので行つたら皆、てんでに取つてしまつて一番少ない御飯におかずを残していた。ほんとうに腹が立つた「食物の恨みは恐ろしい、ということだろうか?」。

入浴後映画があると聞いて居たが、それらしくない。さつそくお母ちゃんの服を着る「お母ちゃん差し入れの服を着た、ということなのだろうか?」なんだか嬉しくつてたまらなかつた。毎日の合掌(この学校は仏教系である)の時、お父さんお母ちゃん、今日一日元気で働けます様お守り下さい。皆お元気で暑いでせうがお働き下さい様お祈り致します、と、かう祈つている。八月のお盆にはどうしても家に帰らして戴ける様に、校長先生がして下さいの事。校長先生以下諸先生は、私達をたいへん御心配して下さるとの事。私達はもつともつとがんばらなくつては……

お母ちゃん御心配なく。力のかぎり働きます。明日は第三水曜で公休日である。仕事のない日である。嬉しくつてたまらない。

七月一九日 水曜日

五時半起床。朝食後六時半より防空こうを掘る。堀りながら、家に帰る事等をいろいろと考えるながら、ただ時間つぶしに(作業を)した。九時ごろまで防空こうを掘る。

作業後洗濯物を取りに行ったら、体操服がなくなっていた。前に石けんをなくして、又体操服をなくして、お母ちゃんにどう言わうかしら。腹が立つやら心配なやらで、くやしうってたまらなかつた。

手紙を家に出さうと思っていたら、赤松さんが家に帰る事を話しに来た。  
たうたう決心して用意をする。

朝食、たくあん、のり、梅。

昼食、いも飯。いもと豆腐の煮物。昼食をたべ終わると急いで服を着て門へ急いだ。

氏名だけ書いた紙を門で出して、赤松さん、小原さん、甲元さん、小枝さんと私の五人で一心に走った。小原さんは十二時前の汽車に乗るつもりで。私達は少し遅れた。

帰るつもりで駅(院庄駅)へ行ったら汽車の出た後であった。赤松さんと二人、一心に歩く。津山駅出発十二時十五分。家に着一時半(彼女は家に帰りたい一心で、院庄駅から津山駅まで歩いた。両駅間は直線距離でおよそ五Kmくらいか。また高野駅から自宅までは歩かなければならないから、こんな時刻になったのである)。お母ちゃんが家にいないので一心にさがした。

卓さん(近所の人)所から帰っていたら(さがしに行つて帰る途中ということか?)お母ちゃんにあふ。卵を二つも入れた流し焼(小麦粉を使った一種のホットケーキ)、たまねぎとタコの煮物をしてもらふ。又、トマトをお父さんが採つて来て冷やして下さった。

一時間と少し家に居つて高野駅へ行く(筆者はたつた一時間を自宅で過ごすために、帰る道だけで合計六Kmくらいは歩いたらしい)。

石けんをなくした事をいふと、「それ位な事はだくじや(かまわない)」、と言われたので、ほんとうに済まぬと思ひながら安心した。石けん、砂糖、流し焼、トマトを持つて出る。汽車が動き出してから、妹が柵(駅の柵のことか?)から顔を出していた。

長屋(納屋)の西でお母ちゃんが弟をおんぶして手を振つていたのが目について(汽車は高野駅を出ると、すぐに家のごく近くを通る)泣けて泣けて仕方がなかつた。青いスカートがはつきり見へて、今でも目にうつっている。

学校の西でトマト、流し焼を喰べた。お腹がいつばいで、えらくつて(苦しくて)こまった。トマト、流し焼を二切れ赤松さんにあげる。

四時半ごろ工場に帰る。

夕食、きうり。お腹がいつばいであったので三木さんにあげ、少し喰べてほとんど残した。

入浴後、私、赤松さん、甲元さん、小枝さん、小原さん、田辺さん、井上敏子さん、中島さん、

山本敏子さん無断外出。田辺さん、井上さん、中島さん、山本さんの四人、時間におくられて、九人、先生の室で説教。先生に叱られて、くやしいより、唯お父さんお母ちゃんに短い時間にいろいろくろうをかけて来てからであるのに、すまないやらで、悲しくつて悲しくつてたまらなかつた。皆散歩に出た後で一人泣く。家にとらと、又しても悲しくなつて来る。

今日、サイパン島の皇軍全員戦死す、との報ある。もつともつとがんばらう。

七月二〇日 木曜日 雨後曇

今日より津山高女、津山商の二校の生徒が現場に入つて、私達と一緒に(作業を)する事になるのだ。

朝食、いも、こうりゃん飯、キウリ漬け、のり。

九時半ごろ現場に二校の生徒入る。私達のすり合わせには、有岡さん、堀江さんと二人二校のどちらかの生徒だろうか?。少しずつ恥ずかしいが話をしていく。

昼食、こうりゃん飯、いも、南京の煮物。

午後少し作業して、滅敵緊急職場大会が一時間間におたつてあった。所長さん、警察官、川北先生、私達は訓辞を聞いて、もつともつとがん張らなくてはと思ふ。

二時半ごろまで作業。洗濯しかけていたら、防空こうを三十分程掘る。

夕食、大豆、空豆を煎ったものが入ったこうりやん飯、ジャガイモの煮物。すぐ入浴。後日記を書いて、後、珠算の練習をする。明日珠算の考査があるとの事。どうしようかしら。  
今日、東条内閣総辞職。私達は唯航空機の増産あるのみ。東条さんを信じて。

七月二日 金曜日 晴  
三時五十分起床。

朝食、キャベツ、フロア、玉ねぎ、ソーメンの味噌汁、こうりやん飯。

朝より、他校の生徒といっしょに作業する。今日はいろいろと、作業をしながらお話しをする。

倉田さんが、私達のバイス台はだらだらしていると言われた事を、岡野お姉さん（著者との関係は不明。従業員かもしれない）が知らせて下さった。一心にしているのに残念でたまらなかつた。

昼食、なすびの味噌煮、こうりやん飯。

二時半までが大へん永かつた。作業後、お室の掃除をすまして、日曜日の帰校について手紙を書いて、守さんにとづける。後、四時ごろより珠算の考査。割算、かけ算、暗算、加算の考査：四十問。ゼロであった。

夕食、こうりやん飯、胡瓜、ワカメの酢物、これは私の大好物、大へんおいしかった。後入浴後室の掃除を済ます。後、日記を書く。

今日一日は大へん忙しい日であった。二十三日の帰校日には誰が来てくれるのかしら。それが楽しみである。

又、午後映画観覧との事、益々嬉しい。お家の皆さん、毎日元気で働き下さいませ。私もまけない様になんばります。

今日は大体に涼しかった。又明日、はり切つて働かう。

七月三日 土曜日 晴

今朝は朝より咽がいたくつて困つた。堀江さん、有岡さんといろいろ話をする。

頭痛がしてこまつた。仕事ができるとする事がなくてぶらぶらする。作業終了後休む。配給物を戴く。石けん、シャンプー、計二十一銭。

朝食、こうりやん飯、ワカメ、豆腐の味噌汁。

昼食、こうりやん・じゃがいも飯、昆布、南京の煮物。

夕食、こうりやん飯、ジャガイモ、牛肉の砂糖煮。

七月三日 日曜日 晴

三時五十分起床。今日は頭が少し痛い、少し熱があつて喉が痛くつて、朝皆より少し遅く起きる。口だけすすいで食堂へ行った。

塩気がわからなくて喰べたくなくなつて、家であつたら寢床に御飯を持って来てもらつて喰べるのに、と思ふと、悲しくつて悲しくつて

たまらなかつた。五時ごろ食事を済ませて永い間寝た。

少しして、二号室の中でお金がなくなつて、それを探すため、皆、室で休む。今朝は頭痛がした時には学校へ行かふか、行かないと又、幸子に来てもらう様に手紙を書いているのに、といろいろなやんだ。家であつたらもう学校を休むであるのに、工場に来てると元気が出て今ではそれ程にもなくなつた。

ヒ総統(アドルフ・ヒトラー)が暗殺されさうになつた(ドイツ国防軍内では、以前から反ヒトラーの気運が盛り上がり、シュタウヘンベルク大佐を中心とするグループが、会議室に爆弾を持ち込み爆殺を企てた。しかし、ヒトラーは奇跡的に命拾いをし、グループのメンバーに対して苛酷な報復を行った事を新聞紙上で見る。

永い間待つて、八時ごろ工場を出発する。途中、頭が痛くつて痛くつて、又しても家であつたらと思ふと、泣けて泣けて仕方がなかつた。

学校へつくと、二校時が始まつていた。きつと十時の汽車で来てくれるであらうとそれを楽しみにしていたが、光井良子さん(妹の同期生。近所に住んでいた)にとづけてくれていた。

すぐ中を見た。巻ずし、草履、すきぐし(櫛)。食事をたのしみにしていたが、時間が短くつてゆつくり喰べられなかつた。巻ずしとお弁当を四分の一程喰べた。そして、映画館に行くのに、頭が割れさうに痛かつた。

学校で高橋先生が、福田さん(「福田」は筆者の旧姓)えらいではないか、トマトを持って何べんも面会に来てもらったか、といわれた時は、泣けて泣けて仕方がなかった。

映画は、「戦ふ女性」だ。これを見て、私もあんなに丈夫であつたらと思ふと弱い体がなまけなくなつてたまらなかつた。「怒れる海」、帝國海軍の今日までの苦勞等を細かに見る。

今日は、ほんとうに朝ゆつくりしたわりに一日中忙しかつた。見学(映画鑑賞?)よりかえつて、家にこずける手紙を書いていたら、はや外に整理、乱筆で意味をなさないかもしれない、と思つて、学校を出る前に良子ちゃんに云つておく(この部分は、乱筆よりも、何のことも書いたものか、日記帳から読みとることができなかつた)。又信ちゃんの事を、大へん迷惑だと思ひながらたのんでおく:「信ちゃん」は、家の近所の人ではないだろうか、というところまでは聞き取れたが、詳細は明らかにならなかつた:。

工場にかへりがけに、中尾さんと二人で、わかもとをかふ。一円六十五銭。いつも幸子に迷惑をかけてすまない。

朝、こうりやん飯、じゃがいもとワカメの味噌汁。

昼、こうりやん飯、たくあん(家に送る)(家に送る)も意味不明)。

夕、こうりやん飯、昆布と大豆の煮物。

(七月二三日の日記は、原稿を読んでも、記述の意図や、出来事のいきさつ・人間関係等、分からないことが多すぎる。筆者も乱文になっている、ということまで気がまわらなかつたのだろうか? どうやら落ち着いて日記を書ける状況ではなかつたように思えてならない。その一方、ヒトラー暗殺未遂事件を書いた新聞を誌むことができた、というのは、どういうことだったのか。当時の厳しい言論統制を考えると、意外な感もするが)

#### 七月二四日 月曜日 晴

今朝四時過起床。頭痛のため遅れたので洗面が出来なかつた。朝食が大へんまずかつたが、ようよう戴く。家であつたら少しも口をつけないであらう。大町先生に云つて仕事をやすむ。ねむつていろいろ先の事が思われて、悲しくつて悲しくつてたまらない。

体の事を思ふと家に帰りたいけれども、お父さんお母ちゃんへすまないし、汗水流して私達を今日迄学校へかわわしてくださつたのに、いろいろと考へていると泣けて泣けて仕方がない。室に一人だけ、思ふだけ泣いた。

午後の食事(昼食のことか?この時、食巻?)をこさえてもらつて持つていたら、おかゆをくださつた。

梅干ニコすぐにお腹がすいてたまらなくなる。三時半迄の時間がすぐ来た様な気がした。皆、

終礼後、体力章のマークをもらつて居られた。それにつけても、又かなしくなつてくる。三時半ごろより一時間裁縫し、マスクを縫ふ。

食事にはこうりやん飯を喰べる。又今日一日も暮れてしまった。島田先生が帰られた。御心配をおかけしておことわりもせず、心ぐるしくつてたまらない。

朝食、こうりやん飯、ナスのお汁。

昼食、おかゆさん、梅干、

夕食、こうりやん飯、ジャガイモと豆腐の煮物。

#### 七月二五日 火曜日 曇時々雨

今日も遅れて起きる。白米飯をはじめて戴く。

南京、豆腐のみそ汁。

早瀬さん、稲見さんと六号室で居つていたら、大町先生が来られて、山田さんの空豆のことから全室をさがされた(山田さんが、禁制の食物をかくし持つていたのを発見され、捜索を受けた、という意味らしい)。いろいろと空豆が出た。さいふのある人もあつた。

先生が検温して下さる時に戴いた紙に、肺炎カタルらしくかいてあつた:。

ああ、これ程小さい時よりおそれていたのに、ついに私はそれをまぬかれる事は出来なかつたのである。お父さん、おかあちゃん、幸子、皆許して下さい加茂のお母さん(著者との関係は不明)の云われた事をおそれながらも、否と思

って今日迄来ていたのに。考へて見ると、いろいろと思ひ当たるふしがある。昨年からの度々の病氣、これくらい親不孝、お国に不忠はない。

此の上は唯、一日も早く健康体になつて自分に適した仕事を行ふほかはない、と思つて見ても、家に帰れば、お父さん、お母ちゃんの驚きと悲しみ、近所の人の白い眼を考へて居ると悲しくなつて来る。

七月二十五日、この日は、私にとつて一生忘れられぬ日であらう。家に帰る様にきつとなるであらうが、先にしらせると心配するであらうし、又、突然帰つてもびつくりするであらうし、今迄の苦勞が水の泡になつてしまふ事になる。いろいろとなやんで居るけれども、私のなやみにもましてお父さんお母ちゃん等は、と考へると、悲しいではすまない。一時ごろ体温をはかつて戴く。三十七度。午前十時ごろ三十六度五分であつた。微熱があるから、なおさら恐ろしい。お昼におかゆを戴く。梅干し二こ。

二時半迄の時間が大へん永い事。又明日も仕事に行けないであらうか等と考へて見る。たうてい行けさうにもない。少しやすんで、皆防空ごうを掘りに出られる。ほんとうにいつも休むばかりして済まない。今日診察してもらひに行くのに、結果はどんなであらうか、と思ふと、恐ろしいやら心配なやらでたまらない。自分の細い体がなまけなくなつてくる。

夕食に、いも御飯をいただく。お腹がすいて

いたせいか、いつもよりおいしかった。

今日病院へ診てもらひに行かうと思つていたのに、大町先生が防空ごうを掘つたりされたので、夕食後でもいつて「病院に行くように」と、言つて？」下さるであらうと思つていたら、食事から帰りに、先生は、福田さん病院へいったんですか？。明日行きます、といつてしまつた。明日仕事を休みますか、といわれて腹が立つたので、(仕事には)出ます、といつてしまつた。自分で悪いと思ひながら、いつてしまつて淋しくなつて来た。

朝食、白米飯(大きなワドン茶わん三杯)、南京と豆腐の味噌汁。

夕食、こうりやん飯(前の記述では「いも御飯をいただく」となつて居るが、原文のまま)、いもとなすの煮物、たくあん。

昼食、おかゆさん、梅干し二こ。

七月二六日 水曜日 晴

今日より仕事に出る。三時五十分起床。

仕事をするのに大へんつらかつた。朝食後室に帰つて便りを出す。昼食までの時間の永かつたこと。

今日は、いろいろと堀江さんと話す。作業後洗濯。寝ま着、フトンオオヒ、マクラカパー等洗濯。

今日病院に行かうと思つていたら、休日であるとの事。盆まで芯棒して、と思つて居る。

そしたら島田先生が来られた。何であらうかと思つていたら、私の出した手紙の為に大へん心配して下さつて、わざわざ工場までおいで下さつた。

家に云つていたら「家族の誰かが？」来てくれたであらう。それと同じ様に、島田先生は：ほんとうに嬉しいやらすまないやらで。

先生は、もしわるかつたらむりしないで休みなさい、といわれた。

お姉さんの様な気がする。

夕食、入浴後、女子寮へ裁台をとりに行く(著者は当然、女子寮で起居していたはずであるが、なぜここで「女子寮」に行く、となつて居るのかは分からない)。有本さんと二人で。だれも、少しも行かふとしない。

新しいワンピースをほどこいて、少し裁つ。黒人島(書名と思われる)を武下さんにかる(借りた？)。島田先生、ほんとうに御心配をおかけしてすみませんでした。御免下さいませ。

朝、なすの味噌汁、こうりやん飯。

昼、ナスとジャガイモの煮物。

晩、ジャガイモ、豆腐、こうりやん飯。

七月二七日 木曜日 晴時々曇

三時五十分起床。午前中の作業の長いこと。

昼食の時、〇〇さんがすぐ大きいのを取つた時にはシャクにさわつた(一度々であるが、食物の量の多少が常に関心の的だつた、ということか

…?。

午後の作業になって、大町先生が、ミシンの処へ行って見なさいといわれた。浦上さんと二人で行く。電気ミシン等でなかなか私達の手に合さうにない。

作業後、池田先生の珠算一時間。入浴後、外出して河原に行くことになっている。

今日は背中が痛いし、肩が痛いし、でも盆までのがまん…。

朝・こうりやん飯・ジャガイモ・ナス・トウフ・アゲの味噌汁

昼、いも、こうりやん飯、南京の煮物。

晩、こうりやん飯、ジャガイモ、ナス、トウフの煮物。

七月二八日 金曜日 曇時々雨

今日も大へん涼しい。三時五十分起床。此のごろは、いつも朝の仕事が早く出来だした。食堂でXXさんが、フの入ったおしるを一番についで、フやナスをさらにへらしてしまつたのにはあきれはてて、物がいへなくなつた。(フル麩。麩ほど満腹感を呼ばない食物ですら、独り占めをすると、怨嗟の的になつた当時の食料事情がよく表れた記述である)。後の人には、一つもみはないのに。

午前中たいぎたいぎにすませます。午後の作業をしていたら、面会とのこと。いって見たら、光井守さんであつた(同じ工場働いていても、

自由には会えなかつたのかもしれない?)。お弁当箱と他に何かあるとの事。作業終了が待ち遠しい。

終了後いって見たら、トマトニがお母ちゃんの手下げに入れてあつた。

すぐ大町先生のところへもつていいたら、わたしはいらんから貴女が喰べなさい、といわれた。いろいろと話したが、結局先生が、私の部屋で喰べなさいといわれて、先生の室で二つ喰べる。満腹になる。

今日は、食事迄、中原淳一の絵を書く。

洋裁をしようと思つていたが、出来なかつた。これから少ししよう。

朝食、こうりやん飯、フとナスの醤油汁。

昼食、こうりやん飯、トマト・シン・キウリの酢醤油。

夕食、ジャガイモ・干しいわしの煮物。

七月二九日 土曜日 晴

三時五十分起床。部屋の掃除なのでかへつて少しねころぶ。大町先生に叱られる。

午前中、堀江さんといろいろ話して作業をする。十時ころミシンの方へ浦上さんといつて、いろいろ話を聞く。午後もつづきをする。大町先生のきげん増々斜である。

作業終了後も、出来なかつたことを少しする。終礼後木型へ行く。元家本家ののがトマトをみつことずけてくれていたが、涙をのんでもつ

てかへつてもらふことにした。そのとき聞いて「元家の人が「トマトの他に弁当箱もことづかつたヨ」などと言つたのだろうか」ベントウ箱をあけて見たら、ウナギ、フナのつけ焼、お父さんの苦心してとつて下さつたものが入つていた。大へんおいしかった。夕食の時戴く。手紙を書いて守さんにことずける。

その時の(ベントウ箱とともにどけられた)手紙に、幸子、お母ちゃんの寄書が入つていた。

私(のため)にと、銘仙の一反、三十五く六円、夏帯一本十八円いくら。私がここに来ていてもいろいろお父さんお母ちゃん心配して下さるのに、弱い体につけて、又してもつらがつたり、さびしがつたり、ほんとうにすまない。お弁当は要らないし面会も来てもらはなくて

もよい、とはいっているが、それでも楽しい、誰が未てくれるであらうか、と、それを樂しみに。ひる寝をしなかつた罰でおべん所の掃除(このころ、動員学生はひる寝が義務づけられてもいたのかもしない。それにしてもトイレ掃除が処罰の手段、というのを当時の女学生は、素直に受け入れていたということだろうか?)。明日から。

七月三〇日 日曜日 晴

三時五十分起床。洗面、食事、後寝る。約一時間。起きて便所のバツ掃除。七時前工場を出発。七時半ごろ学校へつく。良子ちゃんがおべ

んとうを持って来てくださった。中身をあけて見たら煮物と玉子焼き、手紙に、制服が破れたなら送って来て下さいと書いていた。玉子はおばあちゃんが買って下さった、とのこと(当時、筆者の家では鶏を飼育していた、という証言があった。「買って」は「飼って」の書き間違いではないかとも思われるが…)。ほんとうにすまない。また、有り難い。

公民、教育、西洋史、国語、修身。午前中国語までする。おべんとおが待ち遠しかった。おべんとうのおかずはフロロ、玉ねぎ。なつかしくつてたまらない。人にかくれて戴く。お母ちゃん、まい度有難うございます。

急いで、授業後便りを書いてせんすをこつづける、幸子へ：おべんとう箱とともに。

学校を三時四十分ごろ出て、工場へ四時五十分ごろ入る。急いで制服と糸巻と、手紙とを守ることにこつづける。

朝食、豆腐、ジャガイモのお汁。

昼食、工場、たくあん、麦飯。家から、白米飯、玉子焼二分、フロロと玉ねぎの煮物。

夕食、わらびの煮物、いも・こうりやん飯。

七月三十一日 月曜日 晴

三時五十分起床。県女(県立高等女学校)は学校へ行く。少しすり合わせをする、二組。ミシンの方を二時半までする。昼食は遅れて行って少ないのを喰べる。作業後はつ掃除。後洗髪、

後、明後日公休日のことについて手紙を書く。人浴後、守さんにこつづけに行く。食事にて留守。他の人に頼みて帰るが心配でたまらぬ。どうか届けて下さる様に。

今日でどうとう七月も終わった。六月五日に入所して、はやニケ月もたってしまった。毎日毎家のことを忍び、又、学校に行く日を楽しみにしつつ、はや五十六日はたつてしまつた。

後五ヶ月で卒業らしいが、それまでどうしても頑張つて卒業したいと思ひながら、又しても帰りたくつて…。

八月一日よりは一心に働くことにしよう。八月二日の公休日には誰が来て下さるであらうかお母ちゃんが穰ちゃんをつれて来て下さればよいのに。

朝食、ナス、タケノコ、ジャガイモのお汁、ジャガイモ・こうりやん飯、タクアン。

昼食、ナスとジャガイモの煮物、ジャガイモ・コウリヤン飯、タクアン。

夕食、トマト・キウリのゴマの酢の物、こうりやん飯、タクアン。

八月一日 火曜日 晴

どうとう八月だ。一年間で八月程強く、そしてたくましい月はない。七月は明朗、八月はヒマワリの花の如く強く美しい。そしてはつらつとした月である。私はヒマワリの花のごとく、

強い、そして美しい、はつらつとした暮しをしようと思う。

明日は八月の第一公休日、お母ちゃんに来てもらふ様に云っているが、はたして来て戴けるかしら。

七時半ころまで摺合せ、二組する。それより(そのあと、の意味らしい)ミシンの方をはる。お昼休みの時、堀江さんより、XXさんが私の悪口をいったことを聞く。腹が立つてたまらない。

二時半までの間に十三組はる。終わりの二つ程は、十分位ではつた。あと四時半ごろまで昼寝をする(「はる」とは一体何のことだったのか。当時、この工場では飛行機の燃料タンクを製造していたので、タンクの内側に燃料漏れを防ぐ布か皮革を貼っていたのかもしれない)。入浴後理論があるとの事であつたが、まだない。

消灯後、大町先生より一号室へ集合の命令。集まつたら、明日帰宅出来るとのこと。皆、歓声をあげる。夜、なかなかねむれず、夜中にさわいで先生に叱られる。

朝食、ナス・ソーメン・菜つ葉の味噌汁、麦飯、タクアン。

昼食、ジャガイモとにんじんの煮物、ジャガイモ・コウリヤン飯、タクアン。

夕食、南京、こうりやん飯、タクアン。

## 解説

一冊の古びたノートがある。表紙も中の用紙も赤茶けている。粗悪な紙質で、青い罫線のA六判のノートである。そのノートに、青インクで、日々の出来事や家族への思い、貧しい食物のことが連綿と記されている。達筆ではあるが、決してスラスラという感じのものではなく、支離滅裂な記述や、意味不明なところ、書いた本人にしか分からないことも少なくはない。

それにしても、この日記がよく問題にならずに書けたものだと思う。もしこれが当時の権力者・たとえば警察官や憲兵、一部の教師に見られたらどうなったのだろう。日記は、人目を忍んで綴られたものかもしれない。動員されながら「作業がいやでたいぎたいぎにする」などと書いた日記である。

当時「非国民」という言葉が猛威を振るっていた。誰かを抹殺しようと思えば「非国民」と極めつければよかった。軍需工場に動員されながら、家を恋しがり、作業を嫌がるなど、筆者は非国民である。権力が一番嫌う「敗戦主義者」だった。

ノートには、訂正したり書き直した形跡はない。心に浮かぶままを書いたと思われる。太平洋戦争の戦況が末期的な症状を見せていた一九四四年の夏の、二ヶ月足らずという短い間のものである。

一九四〇年、日本の国力は底をつき、マッチ、木炭、砂糖、育児用の乳製品などが配給制度になつてた。配給制度は、必要なものを必要なときに配る、というものではない。欲しくても、金があつても、物がなくなり商店には商品がなく、次

の配給日まで待つほかはない、というものである。一九四一年には殆どの食料、衣類が配給制になつた。国民が飢えても、寒さに震えても、権力者は、ひたすら耐え忍ぶことを強制した。「欲がりません、勝つまでは……」とか、「贅沢は敵だ……」などのスローガンが叫ばれ、女性が晴着を着て外出すると、愛国婦人会という、政府のお声がかかり団体の役員のオバサンが振袖をハサミでチョン切る、という蛮行が行われた。生活用品の大部分が「代用品」にとつて代わられ、ドングリを粉にしたのではないか、というもので主食の「代用品」になつた。信じ難いことに、金属は貴重な戦略物資だ、というので、陶器のコインまで準備され……

……つともこれは流通しなかつたが……、家庭にある金属製品は洗いざらい「供出」させられ、あろうことか、寺院の梵鐘まで戦争のためにもつて行かれた。一方で、支配者は贅をつくした生活を送り、飢えるしかない人達は、存分にその悲哀を味わわされた。

「腹がへつてはいくさまできぬ」というが、日本人はすでに栄養失調に陥っていた。一部の人が「大東亜戦争」と呼んだ戦争の内実がこれだった。

国民すべてが戦争に駆りたてられた。国民は、軍隊か軍需工場のどちらかに送りこまれた。学生や生徒といえども、それから免れる術はなかつた。

強制連行による労働力確保や従軍慰安婦も、国策として実施された。小学生も、「子供」ではなく「少国民」と呼ばれ、戦力として扱われた。

そんな状況にあつてなお、日本は最後の足掻き

をやめず、敗戦当時には、七五〇万人もの軍隊を持つていた。当時の日本国民(植民地を除く)のほぼ一〇パーセントにあたる数である。男性五人に一人が兵隊だった。都市でも農村でも労働力が激減し、もともと不足していた食糧や物資の生産は、一層悲惨な状態になった。日本は敗れるべくして敗れた。

筆者は一九四四年、一七歳のときに軍需工場に徴用された。皮肉にも、衰えた国力とその結果の粗末な食事と、激しい労働が彼女を徴用から解放した。

彼女は体調を崩して生家に帰つたため、日記は八月一日で終わっている。

負けたからこの戦争が悪かつた、というのではない。本末、正義の戦争というものには存在しない。全ての戦争は悪魔の落とし子である。まして、この戦争は、天皇に命を捧げることを最高の美德、とする勢力によつて行われたものである。

この日記は今の高校三年生の年齢の少女の手によるものである。戦時下とはいえ、大規模農家の長女として優雅に暮らしていた彼女にとつて、軍需工場での生活は耐えがたいものであつたろうことは、想像に難くない。

日記の始まりの三月二一日(入試)と、三月三二日の恭助氏の出征は、一九四二年であり、六月三日以後のものは一九四四年のことである。

この間、何故空白になつていのか、その理由を確かめるすべはない。著者が今では童女の世界に戻つたためである。このノートが一九四二年以前に買い求められたものであることだけは確かだ

ある。

さて、恭助氏は一九四五年八月、ミャンマー・ロンブー川で戦死し遺骨は帰らなかった。戦死というより、敗退の途中で溺死にちかい状態での最後だった、との証言が、かつての戦友から寄せられたという。あとほんの数日、生き延びることができていたら、無念の死はなかったかもしれない。彼の妻はすでにこの世を去り、ただ一人の遺児も古希を迎えた。

一九四二年以降、日本は敗戦への道を進む。全滅は「玉砕」、敗退は「転進」と言い換えられ、遂には、アメリカ軍が「スイサイド・アタック(自殺攻撃)」と呼ぶ、古今未曾有の戦い方があみ出された。

原爆投下やソ連参戦が日本の無条件降伏を早めた、とも言えるが、それがなくても、日本民族の死滅で戦争が終わったかもしれない。米軍は一九四五年一〇月、九十九里浜などに上陸作戦を計画していたのだから…。

戦争の惨禍は、まず子供、女性、貧しい階層といった弱者に襲いかかり、はては人間らしい感情も奪いさる。芋ひとつが諍いの原因にもなる。食器に盛った麦飯の多少が、対立の種になる。

先述したが、直接の聞き取りは不可能になってしまった。筆者が元気なときに、当時の様子を聞いておけばよかった、と思っても、時すでにおそしである。僅かな救いは、日記を綴った人が、私の義姉だということである。そのため、妻と私の姉達から、文中に登場する人物や当時の生家の状況を知らることが出来たし、日記そのものを手に取

って読むこともできた。

戦争体験とは、銃を撃つことだけではない。飢餓、奪われる内心の自由、空襲の恐怖、疎開生活とあけていけば限りがない。この日記は、庶民が強いられた犠牲を十分に伝えてくれる。

意味不明なことや、推測するしかないことは(…?)とし、彼女が元気だった時に聞き取れたことや彼女の妹達、それに恭助氏の遺族等から聞き得た事は( )とした。その他はノートの記述のとおりにした。かな遣いは原文のままだし、文脈も乱れたままのところが少なくない。加えて新旧の仮名遣いが入り混じり、はなはた読みづらいが、これも原文のままとした。

(二〇〇六・一一・二二)